校長室だより

松江東高等学校

第17号

令和５年10月21日

○「４０周年記念式典式辞（抜粋）」

白雲流れる嵩の嶺が、赤や黄色に色づきはじめてまいりました。　（中略）

松江東高等学校は、１９８３（昭和５８）年４月、松江市、八束郡の中学校の卒業生増加と普通科高校への進学志向が高まる中で開校されました。

創立からの３０年間で、師弟同行のもと、しっかりとした土台や伝統が培われました。校歌にある「いざや磨かんともがらよ」の歌詞そのままに、互いが切磋琢磨し、学業や部活動で輝かしい実績を残してきました。

その後３０周年を迎えてからの１０年間は、まさに自立に向けた変革の時期でした。

一番大きな変革の契機は、２０１９（平成３１）年２月に県立高校魅力化ビジョンが出されたことでした。松江市内普通科３校が、等質等量から方針転換し、それぞれの特色を具体化・明確化した上で、２０２１年３月実施の入学者選抜より通学区が撤廃することが示されました。

同じ頃１０年以上維持してきた１学年６クラス体制が５クラス体制になり、松江東高校の魅力化、変革を進めることが喫緊の課題となりました。

２０１９（令和元）年度から３年間取り組んだ文部科学省指定の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」や、島根県教育委員会と島根大学が高大連携に関する協定を締結され、松江東高校がパイロットモデル校に指定されたことは、魅力再開拓・再構築の柱となりました。

高校魅力化コンソーシアム先導モデル事業の指定も受け、県内でもいち早く学校応援団とも言える魅力化コンソーシアムを構築したのもこの頃です。

２０２１年度の入学生からは、単位制普通科高校としても生まれ変わりました。

こうして平成から令和に代わっていく中で、コロナ禍にあっても魅力化・変革への歩みを止めず、走り続けたのが松江東高校だったと自負しています。

大きな志を抱き、師弟同行で新しいことに挑戦する気風、気遣いを忘れない豊かな人間性は、松江東高校の矜持でもあり、目指す自立への道程です。

創立３０周年当時の村上校長先生は、『論語』の「子曰わく、吾十有五にして学に志し、三十にして立ち」を引用され、「３０周年の而立の年に･･･未来に向け自立すべく、師弟同行一丸となって邁進してまいります。」とその決意を述べられました。その挨拶文のタイトルが「初心不可忘」です。

これより前の創立１０周年当時の牛尾校長先生も挨拶で「初心不可忘」のことに触れておられます。

「県から松江南・松江北の先輩校に肩を並べて歩み出せる様にと暖かい支援が松江東高校に注ぎ込まれたが、その教育投資の大きさ、県関係者の熱意に驚嘆し、かつ感激して奮起した時の気持ちを大切にと、当時の恒松島根県知事が直筆の書により教訓として教示された言葉が初心不可忘であった。」とのことです。

この書は正面玄関に飾られ、その思いを今に受け継いでいます。

室町時代の能楽師、世阿弥が残した『花鏡』が、「初心不可忘」の言葉のルーツです。その書では、「芸を始めた頃の未熟だった時の気持ちを忘れないことは大事であるが、その年齢・成長段階にふさわしい芸に挑むということは、その年齢・成長段階においてはやはり初心者であり未熟であるから、慢心せず努力しないといけない。」としています。

周年事業は、これまでの歴史や受け継がれた思いを今の段階の学校経営、教育活動に生かしていくための大事な事業です。

３０周年の而立の年から１０年。卒業生が１万有余人に達した４０周年は不惑の年となります。天命を知るとされる節目の５０周年を良い形で迎えるため、慢心せず努力を重ねる決意など、これからの松江東高校への思いを共有する機会に今日の式典がなれば幸いです。

自分の存在や成長、行いが誰かの喜びとなり、誰かを支えることに結びついたとき、人は幸せを感じることができます。生きがいを手にすることができます。そのような経験を松江東高校での三年間でできるよう、そのことが地域の発展にもつながるよう今後も様々な教育活動に積極的に取り組んでまいります。　（後略）